

# 六千六百万円のゴッホの話題

中右瑛

最近のアートな話題は、もっぱらアノ「ゴッホ」である。

オークションに出品された作者不明の油絵が、実はゴッホの作であることが判明。オークションでの落札予想最低価格が、一万〜二万程度とされていたものがゴッホとわかつて、ナント！六千六百万円にまでせりあがつたのである。

私も、このオークションには過去にたびたび参加したのだが、これ程に話題になつたのは初めてである。

この浮世絵巷談で「ゴッホ」を取りあげたのは、ゴッホとウキヨエとは深い関係がある。ゴッホは大のウキヨエ好きで極貧にもかかわらずウキヨエをコレクションし、いまもゴッホ美術館には四百点以上のウキヨエが保管されている。なかでもゴッホは大の広重ファンで、広重の名作「名所江戸百景・大はしあたけの夕立」や「名所江戸百景・亀戸梅屋舗」など模写したことでも知られている。

理想郷のユートピア、日本を夢想したゴッホは、広重の風景画を模写することで、はるかなる江戸の街に遊んだのだった。

広重の話は、またの機会にするとして、ゴッホの話題に移ろう。

このオークション出品は、文化勲章受賞の故中川一政画伯の遺産で、出品作百六十八点のなかにゴッホの油絵が混ざつており、作者不明「農婦」と題されていた。

主宰者シンワアートオークションの社員は、「いや、びっくりしました。日本オークションでゴッホが出品されるのは初めてです。」

この「農婦」がゴッホの初期作品とよく似ており、ゴッホ作ではないかと、主催者がオランダ・アムステルダムのゴッホ美術館に鑑定依頼をしていたのだった。

オークション開催の直前になつて、ゴッホ美術館の調査報告で真作と判明。この「農婦」はゴッホの死後、痛みが激しく修繕、加筆されていたため、判定が難しかつたという。

オークションの前々日、これらの事実が公表され、新聞ニュースで全国に知れ渡り注目された。二月八日、東京「アート・ミュージアムギンザ」のオークション会場は熱気に包まれ、オークションは実施されたのである。参加者はまだかまだかと氣もそそる。始まつて約四時間後、最後の一品として待ちに待つた話題のゴッホ「農婦」が登場した。

当初予想の落札価格の一万～二万を大幅に繰りあげて、五百万円からスタート。一気に六千六百万円にまで高騰。広島の「ウッドワン美術館」（広島県佐伯郡吉和村）が落札した。美術館では、思いもかけず話題のゴッホが思ったより安く入手出来て満足。ゴッホが日本に留まり、美術館のある吉和村は、おおきな「宝」が来ると大いに歓迎している。四月ごろに公開される予定だという。

ゴッホはオーラクションではいつも話題の中心である。

神戸新聞平成十五年二月九日 ゴッホ落札を報じた記事



オークションにかけられ6600万円で落札されたゴッホの油彩画「農婦」＝8日夜、東京・銀座のアート・ミュージアム・ギンザ

## まさに「ゴッホ効果」

# 6600万円

### 真作判明の「農婦」

洋画家、故川一政氏所有していた美術コレクションの中、ゴッホの作品であることが分かった。油彩画「農婦」が八品、オーラクションにかけられ、当初「作者不詳」として「万一二万円」とあれられた想価値を大幅に回る。六千六百万円と落札された。

落札したのは広島の「ウッドワン美術館」の本

主

（吉和村）。

ドワーフ美術館

（同県佐

毛糸で紡ぐ魔女

）。

ドワーフ美術館

（同県佐

毛糸で紡ぐ魔女

# イカナゴの季節

浅黄斑 あさぎ まだら △作家いんどう とおる▽

絵・犬童徹



酒と食が生き甲斐の小生。相変わらず、いろいろ食つております。たとえば「北野ケーニー」で

ております。すみませんね。（開き直つてどうする？）

フレンチを。生田神社前に戻った「安さん」では テッカリとテッサ、「きんびら」で和歌山の漁師料理を食つた勢いで「猫音屋」というところで、 クエ鍋という珍しいものも食つちました。さら に勢いをかって、震災後に芦屋へ移転した「神 戸館」まで足を伸ばし、絶品ステーキをといった 具合です。

でも、こんなことを書き連ねたところで読者が おいしい気分になれるはずもなく、この野郎、と ねたまれるのがオチでしょうね。はい、はつきり 自慢です。どうだ、こんなうまいもんを食つたぞ、 うらやましいだろ、ってやつですね。小生、心 であるわりには、こんな性格の悪さも持ち合わせ

もっとも日々を美食に明け暮らしているわけで はありません。普段は古女房の手料理を食してお りますし、外食にしても「王将」の五目麺セット だつたり、「家族亭」の親子丼セットだつたりし ます。ミニうどんがついたやつですね。それにし ても、近頃の丼の豊富さには目を見張つております。いったいどのくらいの種類があるのでしょ うか。小生が若かりし頃は、丼といえば、鰻丼は別 格として、親子丼、玉子丼、木の葉丼、それにカ ツ丼くらいなものでしたが…。

それにしても、丼、と書いてなぜ「どんぶり」 なのか。丼とは果して料理の名であるのか、器の 名であるのか。はたまた、どういう謂われが潜ん

でいるのか。皆様、そういった疑問を持たれたことはございませんか。ああ、ありませんか。なら、いいんですけどね。でも、長らくその謎を追い求め、ついに突き止めた小生としては、これを書かずにはおれません。しかしながら、これを書くにはやや紙数が足りなくなりそうですし、それに「みだら」な話に及びそうにもないので、これは次回のお楽しみということで、はやばやと予告をいたす次第。

話をどうしても食い物から離れませんが、いよいよ「イカナゴの釣煮」の季節になりました。首を曲げて煮上がる姿が釣のようなので釣煮と呼ばれるこの料理は、おそらく唯一の神戸の郷土料理ではないでしょうか。そしてその旬は、二月から五月まで。というのも、二月頃になると須磨の浜には「ふるせ」と呼ぶ十センチから十二センチのイカナゴが出来、「新子」を産みます。五月には七センチから八センチくらいまで育ってしまい、がたりと風味が落ちてしまいます。小生は、その正当なる作り方を知っていますが、作ったことは一度もありません。でも垂水在住の同業者、ミステリー作家の高島哲夫氏は、毎年、この季節になると、何十キロと自作して、見事なイカナゴの釣煮をお裾分けしてくれます。いい友人を持つ

たものです。

ところで先ほど、唯一の郷土料理などと書きましたが、本当にそうなのかと気になつて、古い書物を引っ張り出して調べてみると「あな茶」という料理を発見して、どきりとしました。「あな」だけでどきりとする小生がもちろん悪いのであります、なんのことはない、これは焼き穴子の茶漬けでした。焼き穴子をぶつぶつと一センチくらいたり、大根おろしと、おろしわさびを用意します。これらを熱いご飯に乗せ、番茶をかけるとできあがり。

ほかにも怪しい料理を発見しました。名付けて「東海夫人の酢みそ和え」。はてさて東海夫人とは、なんのこっちゃ? で、辞書を引いてみました。

広辞苑にはありませんでしたが、小学館の国語大辞典には「イガイ」のことと、書かれておりました。これ、瀬戸貝とも呼ばれる二枚貝で、貝肉は黒ずんだ茶褐色をして、あまり感心しないのです。が味はなかなか。で、見たところ、女性の象徴に似ているというので、昔の人は「東海夫人」なんてしゃれた名を付けたんだでしょうな、きっと。

■浅黄斑（あさきまだら）推理作家。一九四六年神戸市生まれ。西神ニュータウンに在住。一九九一年小説推理新人賞、一九九五年日本文芸家クラブ大賞を受賞。日本文芸家会員。日本文芸家クラブ関西支部長。「さよなら風さえ吹きすぎる」「ちよんがれ西鶴」「櫻島殺人海流」「トカラ海上殺人前線」など著書多数。

# 正義

出石アカル

カット＝菅原 洸人

コーヒーを淹れながら、なんの脈略もなく口をついて出た童謡がある。

「村の渡しの船頭さんは今年60の…」そのあとである。「おじいさん」と続くのだ。

エッ！と思ってしまった。実はわたし、今年誕生日が来れば、満60歳である。しかしだ孫はない。

さらに、「年はとってもお船をこぐ時は元気いっぱいがしながら…」（船頭さん・武内俊子作詞）

ちょっととショックだった。この歌では、60歳はすでにかなりのご老体である。船をこぐ時だけ元気になるのだ。わたしにその自覚は全くなかった。調べてみるとこの歌、昭和16年に流行している。

その当時の60歳はそうだったのである。昔の人は随分早く老けたのだ。そう言えば、二葉亭四迷は46歳、正岡子規36歳、国木田独歩38歳、そして夏目漱石は50歳で死んでいる。みな老成の感がある。時代が違うのだ、と自らを納得させていく。



\* \*

余談が長くなってしまった。今回の「コーヒー・カップの耳」である。

元ヤの加賀繁躬さん。両方の小指を途中から千切ってしまって、付き合い始めた彼女に驚かれ、「ちょっと深爪しただけや」と言った話を、この連載の第一回目に書いた。その人の話をまた。

ユーモアがあるものだから、この人の話はいくらでもあって、月一の連載なら彼のことを書くだけで保てるというものだ。しかしながら、お洒落な『KOBECCO』の編集長が、品位が落ちるのを心配してくれそうもないのに、時どき顔を出してもらう程度にする。

わたしには無縁の世界を生きて来た人なので、この人の話は興味津々である。

出所の際の気持をたずねてみた。

「家の天井がえらい低く感じたんが妙に印象に残ってマ。二年半、監獄の天井を見てたからなあ」

思いがけない感想である。けっこう繊細な神経

をしているのだ。見かけとは全く違う。

「最初にしたかったことでっか?そらやつぱりオンナですがな。嫁はんと久しぶりに家で向かい合つたら、なんや照れ臭かつたなあ」

体重90キロ。足を洗つたとは言つても、こわもて顔のスキンヘッドである。嫁さんとこれから久

しぶりのナニという時に照れてしまうとは、滑稽!

いや失礼、カワイイではないか。

いすし・あかる 43年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒー・カップの耳」(編集工房ノア刊)にて、2002年度第31回フルーメール賞文学部門受賞。

話してくれる。うちのメニューにビールはないのだが、時間帯によっては要望に応じている。

「この筑前煮、美味しいなあ。大学行つた時に初めて食べて、美味しいなあ思たんやけど…。えっ? 大学でっか? わしが行つてた大学は国立でっせ。ちょっと塙が高こましただけだな。規律もそら厳しもんでした」

ビールが入ると、こんなユーモアを交えながら、話はいつまでも続く。

「こないだ、並んでバス待つとったんですわ。一番前に通院のおばあさん、その後ろで男が新聞読んで、次にわし、後ろが若い女の子やつた。そこへネクタイ絞めた男が来よつて、ウロウロしとつて、バスが来たらスッと一番前に出て乗ろうとしよつたんや。『コラッ、ワレー!』 ゆうて襟首つかんで引きずり下ろしたつた。いや別に正義

ぶつたわけやおまへん。ほかの客はどうでもよろしおまんねん。並んだる者の顔、一応見といて、こんなんやつたら割り込んで大丈夫、思いよつたんやろ。ゆうたら、わしの顔の値踏みしよつたんや。一発カマシ入れんわけにはいきまへんわな」 その男、さぞ恐かったであろうが、胸のすく話である。また「正義ぶつたわけやない」というのが正直でなんとも面白い。

# 神戸はしけの女

絵・新家保夫

## 神戸のカモメ

船の中がざわめいている。

荷物を纏める人、眠っている子供をゆり動かす母、神戸が近づいたのだろうか、船の中人々の動きが目立ってきた。しばらくして船内アナウンスが入り、もう少しで神戸に着くことを知らせる。

とみは順一が港まで迎えにきてくれるとうことでそれ程不安ではなかつた。

ねんねこでしつかり茂を背負い、柳ごおりと垢抜けのしないボストンバック、大阪時代に買った大事な布製の手提げ袋をしつかり持つて船上にと近づいた。荷物の重さも気にならない風情で、とみは下船する人の流れの中に神戸人らしい若い二人組の女性の服装が気になつた。

長めのフレアースカートに水色のセーターを着た二十七、八才の人と、花の柄が入った黒地のスカートに白いセーターを着て、うすいレインコートのような物を上から羽織る女



性にとみは思った。

「やっぱり神戸や。あかぬけしててる」

とみは多度津の港を出るとき見た風景と異なる神戸の活気ある港の様子を、茂を背負う肩の重さも忘れるように見ていた。  
人の群はなれた様子で関西汽船の船着き場からそれぞれの家路につくのだろうか、早足で消えていった。

「おばちゃん」

「なんね。おばちゃんじゃない。ねえちゃんね。」

とみは両手に荷物を持ったまま子供にいった。

「アメ落した」

子供は一大事のように、見ず知らずのとみにいった。

「何処ね」と、とみは子供の指差す方を見て順一の姿をさがさなくてはというあせりを感じていた。

「落したのはきたないけん、お姉ちゃんのいも飴あげる」

とみは布製の手提げ袋から新聞紙につつんだ白いいも飴を出すと、小さな手のひらに渡した。子供は逃げるように口にほおばると関西汽船の船着き場から消えた。

「茂」

順一の元気な声が笑顔と共に近づいて来た。とみは元気な顔に笑みをいっぱいいためて順一の顔を見た。

「つかれたる」

小柄な順一の体に似合わない太い腕がとみの両手から軽々と順一の手の中に持ち変えられた。とみは茂の重みを背に感じながら、順一の存在を大きく受止めっていた。

昭和三十二年頃の神戸は西部海面埋立第一工区が着工されたり、市立須磨水族館が開館、市立神戸婦人会館が開館したのもこの頃であった。また、港湾労務者に絶対的な力を持っていたのが手配師で現場監督の役目を持っているのが常であった。人夫と称される人達は手配師に不利なことは絶対口外しない。この結束にそむけば、たちまち神戸港にいられ

なくなるだけでなく、どこの港でも相手にされなくなってしまうのである。

当時起つたリンチ事件も同僚の人夫だけでなく、重傷の本人すら“事故だ”といつわり続け警察も歯が立たなかつた。

昭和三十一年九月十六日付毎日新聞は、全港湾労組神戸地本（多賀一委員長）が秋季闘争の一環として、手配師組織追放へ立ち上がるこことを報じた。しかし、手配師といわれる人達は、各荷役会社の正式職員の労務係として届出されており、その人達の行為も表面上からは法的取締りの理由がなく、労務内容も多種多様で、その労務内容の差によって賃金が異なつており、容易にピンハネの実態がつかめないという状態で、たとえ暴力的手配の実態にさぐりを入れても、法律的になんらの取締りの方法がみつからないのが悩みといえれば悩みであった。多賀一委員長の秋季闘争のストライガーグも多くの問題をかかえることとなり、上層官公庁への働きかけと同時に、職場集会によつて労務者自体の意識向上をはかることが急がれた。

神戸新聞は、

港湾労働者は泣いている。

ピンハネが“手腕”三昼夜労働もザラ  
ただ耐えるより反抗の手段もない世界

ミナトのオンボロ人生  
ゴロ寝の三十円宿 手から口の暮し

あぶれたらメシ抜き

仕事も「手配師」のきげん次第

などと昭和三十一年九月十五日から港の様子を書きたてた。

一方朝日新聞などでも、日雇新賃金制、来月から労働法に即し、とか  
“手配師排除”を支援、兵庫総評全国運動へ起つなどと、朝日、毎日新聞なども港へのメスを入れた。

順一は日神運輸という大手の会社に採用されており、日雇労務者の立場とはちがつていた。

「腹へったろう」

「うん」

とみは素直に答えた。家を出てから茂にお乳を飲ませたり、おしめを変えることに時間を取られたせいか、食事らしい食べ物を口に入れていないのに気がついたのか、どっと腹の中に空腹感を感じた

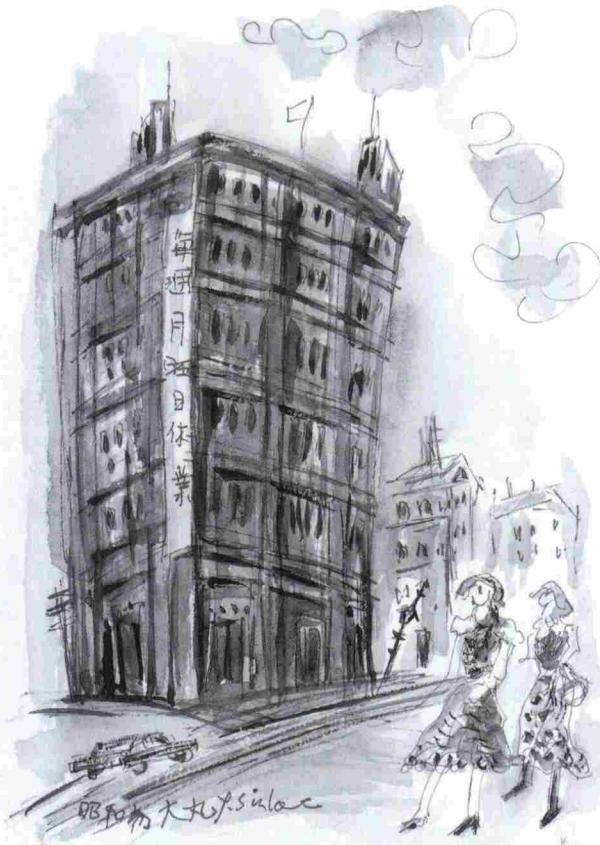
とみは順一の背越しに見える六甲山のゆるやかな緑の山を、佐柳の海から見える山々のつらなりと似ていると思った。

順一は玉子丼ときつねうどんを注文した。

とみは「玉子丼」と順一に小さな声でいった。眼鏡がさしたのか茂が泣き声を上げた。よし、よし、と二十三才の母親は周囲に気をつかったのか店の外に出て茂の泣き声が静まるのをまって店に入ってきた。順一は久しぶりに逢う息子をなれない手つきで、とみの背から抱きあげた。周囲の客も垢抜けしない若い二人のカップルを優しいまなざしで見ていた。順一はビールを一杯飲むと、茂をあやしながら、とみに丼を食べるよううすすめた。

茂がまた泣き出しそうになつた。とみは茂を自分の胸に抱き大きな乳房を出して茂の口にふくませた。茂は母の胸のぬくもりに安堵したのか一生懸命とみの乳房を吸つた。

「先に食べて」



とみは、うどんのさめるのを気遣った。順一は男らしく、うどんと丼をあつという間に食べ終った。すやすやと茂の寝息と共にふくよかな、とみの乳房は順一の視界から消えた。

うどん四十五円、牛乳十三円の頃である。神戸に少し慣れたのか、順一は神戸に外国人が多くいて食べ物も外人向けの物が多くあることを少々自慢げにいった。先程見た女性の服装を思い出し、神戸にいることを、とみはうれしく思った。

順一は日神運輸から五十トンの船を一隻与えられていた。主に野菜、果物を大型船に運んだり荷受けに行ったりするのが仕事であり、この日も早朝より一仕事終えた後だけに気持にもゆとりがあった。

今日からとみの生活は、この五十トンの船の中で過ごすこととなる。

昔の船だまりは一社二十隻から百隻ぐらいまで大小の会社が自前の木造船を持っていた。

とみは関西汽船の乗り場から歩いてさほど遠くない船だまりまで行つて、その船の多さにびっくりしたような顔をした。一つの村のよう�数えきれないような大小の木造船が海にゆれていた「危ないけん気をつけろ」順一はとみの手を取るとゆれる大型の船にとみを誘導した。次から次へ、十二、三隻の船を通り過ぎた。それらの船の持ち主も誰一人文句をいう人はいなかつた。そもそもそのはず、互いに誰かの船までの道路のようなもので水上で生活する人達のそれが自然の姿なのだ。「ここだ」順一が立ち止った。船の中では小さい方だろう。とみはゴザ一枚程ある船先の生活の場を見、茂を寝かせる舟底のゴザ三枚程ある部屋で三人の生活が始まるのだと覚悟させられた。とみは順一と茂がいれば幸せであり、佐柳で過ごした漁場の生活も父の姿を見て育ったせいもあり、町中のゆつたりする生活を知らないとみにとつてよかつたのかも知れない。

船底のゴザが敷かれた部屋は中腰でないと動けない設計になつていた。船の大きさと荷物を積む積載量による設計の条件でもあつたようだ。風呂はもちろん、電気、水道もない、明りはランプ、水は港からホースで



船内の木の桶に入る。洗濯も港の水の出る所を利用して洗い、荷物を積んでいる何処かにロープをはり干すのだった。

とみは火起しから始めた。茂のミルク作りのためである。順一が何処からか木の切れ端を集めていた。船先の入った所にあるゴザ一枚程の場所は少し高くなつており水桶、コンロは座つたまま使わなくてはならぬ不便さがあつた。その反対の所に申し訳のような奥行のない棚があり、男世帯を思わせるようになタバコと灰皿、乾ききった食べかけのみかんが置いてあつた。湯の沸くのを待つ間、とみは茂を寝かせるために船のゆれをかわす格好で用心深く船底の方へおりて行つた。身体をかがめたまま茂を床に寝かせると、急いで湯の沸く所へ行こうと立つてしまつたのだ。ゴツン、とみは始めて船底の低さに頭をなぜながら苦笑した。ようやく一心地ついた頃神戸の夜景がほんのり見えた。船上の荷物を積む場所だけが自分の低い背丈を満足させ無理のない姿勢でいられる場所であった。

とみの初めての神戸の夜は、茂に乳房をふくませながら、船酔いにとみ自身何度も食べた物をもどしてしまつた。最後には金だらいを横に置いてはきながら茂にお乳を飲ませた。その状態は四・五日続いた。しかし茂は母の苦労を知らぬげに母の胸に小さな手をしがみつくような格好であつて、母の顔をじつと見つめていた。

カモメ

カモメ

朝が来たなら空を見て  
佐柳の母に話すんよ！  
心の中で話すんよ！

(続く)



岡本真穂（おかもと まほ）  
詩人。関西文学同人、関西詩人協会会員、神戸異分野文  
流会会長。著書「詩画集 花野」「御影」。



愛読者  
サロン



★ 每日お寒い日が続いて居ります。初春のお喜びとともに「神戸っ子」の500号おめでとうございます。1月はいつもより入荷が遅れたようで、今頃になってやっと手にはいりました。可愛らしくおしゃれなマガジンがうれしくて、レジで受けとった後、タウン誌のコーナーを覗いてみましたがけれど、どのタウン誌よりもひときわ目立っていたよう私には見えました。

「500号記念展」もあったんですね。表紙を飾った名画の数々、近ければ行きましたかたと残念に思つて居ります。「復刻版名文集」はこのよくな味い深いエッセイが今まで載せられていたのだと思いつつ、一つ一つ読みませて頂きました。私の本棚には「むかしの神戸」「神戸・街ものがたり」「ト」「アロードスタイルブック」「神戸雑学」「神戸ものがたり」「神戸わがふるさと」（陳舜臣さんのものは他に

あります）。そしてその隣には毎月増えていく「神戸っ子」が並んで居ります。神戸を離れた年月の方が長くなってしまいましてが、私はずっと『神戸っ子』だと思って居ります。

「1月号はもっと早く入荷しますのでー。」私が何度も催促するのですから、ジンク堂の定員さんがそういって下さいました。今年の冬は例年より寒いのでしょうか、東京は積雪もありました。御忙しい日々で、どうぞ御体を御大切に御過ごしくださいますように、祈りつつ。

（東京都・西垣武子）

★ 「びっと・いん」のコナーでご近所の「辛屋」が載つてました。辛いものがダメな私は、「ラーメンは食べたいけど、辛いのばつかしかな。」と思って、素通りばかりでした。けれどすじラーメン「石焼ビビンバ」って好物。ぜひ、いつみたいと思います。

（明石市・安岡陽子）

★ 1月号はまだバラバラとしか拝見してませんが、なんか神戸にゆかりのある人達の文面が載つてるので、

きっちり見させてもらうつもりです。姉は昔からコリアン先生（遠藤周作）と筒井康隆の大ファンでした。佐藤愛子の女子学生時代の話なんかも姉からチラッと聞いたものです。P74の兵庫と神戸を読んで母がよく荷しますのでー。私が何度も催促するのですから、ジンク堂の定員さんがそういって下さいました。今年の冬は例年より寒いのでしょうか、東京は積雪もありました。御忙しい日々で、どうぞ御体を御大切に御過ごしくださいますように、祈りつつ。

（広島県）から、らん展を聞いたものです。P74の兵庫と神戸から初まり、今の三宮みたいなものだったと。兵庫出身の淀川長治さんと、亡き大おばさん（震災で亡くなりました）がは小学校の同級生だったそうで、淀川さんの楽屋へ押しかけて行つたことがあると（傍迷惑な話です）も聞きました。ノスタルジーでんナ！

（高槻市・高橋枝里）

★ 学生時代の頃の神戸の面影はなくなりつあります。私が、その中変わらず神戸の心髄をつかんでる神戸っ子！頑張ってね。

（西区・丸川奈都子）

★ 500号おめでとうございます。私も長く愛読させていただいていますので、とてもうれしいです。本号の記事も以前読んだものもありなつかしさでいっぱいです。

（西区・小池瑞江）

★ 今月号の特集のひとつにお酒があり思わずニヤッとしてしまいました。私の住んでる所は御影という事もあり、今回記載されている酒蔵館はとても親しみ深いです。散歩がてらに行けるのは、お酒の大好きな私はとつて幸せな事です。

（東灘区・西盛天香）

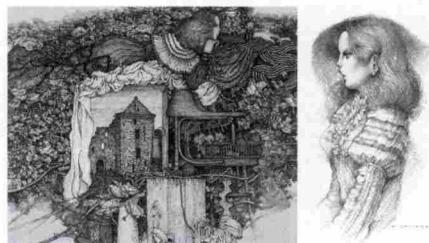
田辺聖子	澤田勝寛	青木重雄	上島達司	川瀬喜代子	田川政子	橋本一豊
陳舜臣	白石弘子	荒川克郎	鵜殿麻利絵	嘉本楨夫	鶴田篤作	畠崎廣敏
佐藤廉	島川弘子	内田健司	内田邦子	上林英一	田崎俊作	坂東慧
森實勉	島黄斑	馬野邦子	馬野邦子	木口衛	龍口篤宏	坂東節子
一	浅黄斑	新谷秀紀	新谷秀紀	木下章夫	鶴田浩二	東村衛
新井満	王柏林	武田則明	武田則明	筒井康隆	廣野幸助	吉島淑子
石阪春生	大崎泰三	田中國夫	田中國夫	岡田美代	坂東節子	村上和子
今井啓介	鶴殿ようこ	中村友一	中村友一	伊勢田史郎	森美代子	村上美穂
白坂能朗	榎本靖子	永田崩	永田崩	小室豊允	米花穂	村上和子
安藤忠雄	中右瑛	中右瑛	中右瑛	木下健	森喬一	村上和子
新谷秀紀	中西勝	西中勝	西中勝	大庭浩	坂東節子	村上和子
武田則明	林本ハルミ	市野弘之	市野弘之	上月倫子	坂東節子	村上和子
鶴殿麻利絵	緒方しげを	藤本ハルミ	井植真雄	永田典子	森美代子	村上和子
内田健司	望月美佐	望月美佐	貝原俊民	中野肇	坂東節子	村上和子
馬野邦子	松本幸三	松本幸三	貝原俊民	長澤昭	坂東節子	村上和子
新谷秀紀	森本泰好	森本泰好	柏井健一	藤原明子	坂東節子	村上和子
武田則明	市村礼子	市村礼子	下村俊子	星住輝子	坂東節子	村上和子
鶴田篤作	岩間流夫	岩間流夫	鶴澤リツ子	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	嘉納毅六	嘉納毅六	嘉納毅六	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	佐野漣箕	佐野漣箕	佐野漣箕	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	妹尾美智子	妹尾美智子	妹尾美智子	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	園田正和	園田正和	園田正和	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	羽多悦子	羽多悦子	羽多悦子	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	柳木茂男	柳木茂男	柳木茂男	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	北大道楽園	北大道楽園	北大道楽園	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	小島知光	小島知光	小島知光	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	米田定藏	米田定藏	米田定藏	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	渡辺二笙	渡辺二笙	渡辺二笙	吉島淑子	坂東節子	村上和子
坂東節子	川上勉	川上勉	川上勉	吉島淑子	坂東節子	村上和子

★42周年を迎えた月刊神戸つ子にいろいろお世話いただいた方々

## ざくろと古い城の絵 〈女のいる風景〉

162 × 164

## 素描 〈女のいる風景〉



### 〈表紙のことば〉

130号ざくろと古い城の絵〈女のいる風景〉は2000年の作品で新制作展に出品したものである。また、エンピツ素描は最近かいたものの一つである。表紙をかざるにあたって先ず、女の横たわる姿を入れたくなりこのざくろと古い城の絵〈女のいる風景〉をトリミングすることを考え、その下の空間に女の横顔で構成したわけだが、水彩による自由な動きを画面づくりにうまく役立たせられたと思っている。

2003年4月 石阪 春生

